

## 調査報告

## 看護学生の日常生活体験の実態調査

高井 奈津子・茶碗谷 草子・前垣 綾子・滋野 和恵・泉澤 真紀・辻 慶子

## A study on present state of daily life on nursing students

TAKAI Natsuko, CHAWANYA Kayako, MAEGAKI Ayako, SHIGENO Kazue,  
IZUMISAWA Maki and TSUJI Keiko

**Abstract:** It is said that the daily life skill and the nursing skill come from their daily life ability. The tendency not to use of our limb function has brought changes to our lifestyle since 1980's. The purpose of this study is to grasp the present state of nursing students daily life on the basis of the study of their daily life skills of TSUJI(2008).

31 nursing students of the first grade were investigated with a questionnaire on their daily life. It is contents related to TSUJI(2008). The results indicated that the students more than 80% experienced that "use the chopsticks" "use the scissors" "squeeze it", "attach a button" "squat down" by daily life. The students who replied it when I washed it by hand and used the stairs were few.

By analyzing the answers, the following correlations were suggested: There were many students who replied it when washing and the cleaning did once or twice a week. In the student who lived with some housemates, there were many people who did not get ready for the meal, in addition, I cleaned one's room but did not clean a bath / the restroom to use jointly. The results were indicated that the education of nursing skill needs to be arranged understanding student's background.

## I. はじめに

1980年代から2000年代にかけて、学生の生活体験の不足が、看護技術の習得を困難にしているとする研究が多数あり、手足を使う生活技術能力も低下していると報告されている。

しかし、辻<sup>1)</sup>の生活技術の比較研究では、10年前、20年前と比べて必ずしも生活技術が劣っているとは言えない結果であった。それにもかかわらず看護技術を指導する教員らは、学生の動作が看護技術とは結びつきにくいものであると感じている。たとえば細やかな手先の動きができず摂子や注射器の持ち方や使い方がぎこちなく、リネ

ン交換や体位変換などでは、バランスの良い安定した姿勢の保持が難しい。自分の体を効率よく使うことを習得するには多くの時間が必要であるが、練習に対してはきわめてドライの傾向がある。また学生の意識は形どおりの手順や方法にとらわれがちである。

このような実態は、習慣化された日常生活動作が他の場面で応用されにくく意識化の努力が必要であることや、自分中心から他者中心の考え方を育てることが指導上の課題であることを示唆しているが、学生の日常生活の実態はどのようなものであろうか。

簡略化、簡便化された生活や個人主義的な生活

スタイル自体が、ある場面で身に付けた技術を生かす機会を学生から奪っていることが考えられる。また、機会が少ないゆえに自分の頭で考えて応用していくという体験や、他者の好みや価値観を理解できる能力が培われる日常体験も少ないことが予想される。

辻は、鉛筆や箸の持ち方と使い方、紐の結び方、タオルの絞り方などの生活技術と、足の動きについて実技調査を行った。本研究では辻が取り上げた生活技術について、日常生活でどのように使われているのか、学生の日常生活体験の実態について調査し、生活技術や看護技術の習得との関連で考察した。

## Ⅱ. 研究目的

看護学生の日常生活体験について実態を把握し、看護技術の教育活動の一助とする

## Ⅲ. 研究方法及び分析方法

1.対象：A大学看護学科1年生31名

2.調査日：2008年12月5日

### 3.調査方法および分析

本調査は、辻（2008）の生活技術の実技調査後に同じ対象者に自記式質問紙法により実施した。調査内容は、①個人属性として、年齢、性別、居住形態（同居か独居か）、寝具の種類、②生活技術の習得に関連すると思われる日常生活体験13項目について、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの4段階、③日常生活体験の頻度を、7項目について、「しない」、「週1～2回」、「週3回以上」、「ほぼ毎日」の4段階で回答を求めた（巻末資料参照）。分析は、各項目の人数（%）を算出した。また、日常生活体験の頻度については、居住形態によって日常生活体験の頻度が異なると考え各カテゴリーの傾向を検討し

た。

## 4.倫理的配慮

本研究は、北海道文教大学倫理審査会の審査を受け承認を得た。対象者には研究目的、内容、プライバシーの保護、途中辞退の自由、調査結果は授業評価とは無関係であり、本研究以外に使用せず、個人を特定することはないことを口頭で説明し、協力を得られた学生に調査を行った。

## Ⅳ. 結果および考察

### 1.研究対象の属性

調査対象者は31人、うち有効回答者は31人、有効回答率は100%であった。有効回答者の性別は男性が6人、女性が25人であった。年齢は18～25歳、平均年齢は19.4歳であった。住居形態では、同居が21人、独居が10人であった。利き手は右利きが27人、左利きが4人であった。家事援助をしてくれる他者と同居しているものは、20人であった。使用している寝具については、布団が6人、ベッドが25人であった。

### 2.生活技術の習得に関連する日常生活体験について（図1）

辻は、足趾の巧緻性は前後左右の安定した重心移動に係るものとして足趾の開き具合やつま先歩きができるかなどについて調査し、学生が安定した姿勢をとれる要素を持っていることを指摘した。そこで、日常生活で下肢がどのように使われているかについてたずねた。

その結果、【落としたものはしゃがんで拾う】は、「非常に当てはまる」22人（38.7%）、「少し当てはまる」13人（41.9%）、「あまり当てはまらない」6人（19.4%）、「全く当てはまらない」はいなかった。【エレベーターやエスカレーターより階段を使う】は、「非常に当てはまる」5人（16.1%）、「少し当てはまる」13人（41.9%）、「あまり当てはまらない」13人（41.9%）、「全く当てはまらない」

い」はいなかった。【足先の狭い靴を好んで履く】は、「非常に当てはまる」1人(3.2%)、「少し当てはまる」10人(31.3%)、「あまり当てはまらない」13人(41.9%)、「全く当てはまらない」7人(22.6%)であった。

生活援助技術のデモンストレーション中に見学していた学生から、「しゃがんだら足が痛くなるから、立っている方が良い。」という言葉が聞かれる。学生は、しゃがむ動作に対して身体への負担を訴える。最近、10代の若者たちが学内や電車の中で、地べたに座り込んでいる光景も目にする。日本はここ数十年で生活様式ががらりと変化した。例えば、トイレは和式から洋式トイレへ、寝具は布団からベッドへと欧米スタイルの生活様式へと変化している中、「しゃがむ」という動作をする機会が、日常の中で少なくなっている。足趾の開きは立位姿勢や膝を屈曲して体重を支える際に重要となる。持永<sup>2)</sup>は、病床作りの際、足趾の開きが悪い、膝を自由に曲げられない、利き足が育っていないので動きが硬いなど、腰痛の原因となることを指摘している。また、室<sup>3)</sup>は日常生活の場で必要のなくなっている足趾の内反、外反、特に外反の衰えを指摘している。エレベーターやエスカレーターを使うことが多く、歩く機

会が減少していることなどが身体機能の低下をまねいている。また、しゃがむことはあるが、膝を屈曲した状態で自由に体を動かすという重心移動をすることは少なく、高橋<sup>4)</sup>が述べるように普段あまり使い慣れない筋群をつかうため身体的負担になると考えられる。

また、生活援助技術での「ボディメカニクス」は、人間工学用語で、身体の骨格・筋・内臓等の各系統間の力学的相互関係の事を意味する言葉であり、効率の良い身体の使い方として看護援助に用いられている。学生は、人間工学的姿勢や動作が知識としては習得されていても、動作と連係することが出来ないのが現状である。これは、学生にとって、たとえば膝を屈曲して重心を低く保つなどのボディメカニクスを活用した姿勢や重心移動が、日常生活の中で体験が乏しいからではないかと考える。

【拭き掃除をする時は雑巾を絞って使う】は、「非常に当てはまる」22人(71.0%)、「少し当てはまる」4人(12.9%)、「あまり当てはまらない」4人(12.9%)、「全く当てはまらない」1人(3.2%)であり、ほとんどの学生が行っている。【一日の生活のうち雑巾又はタオルなどを絞る機会がある】は、「非常に当てはまる」12人(38.7%)、「少

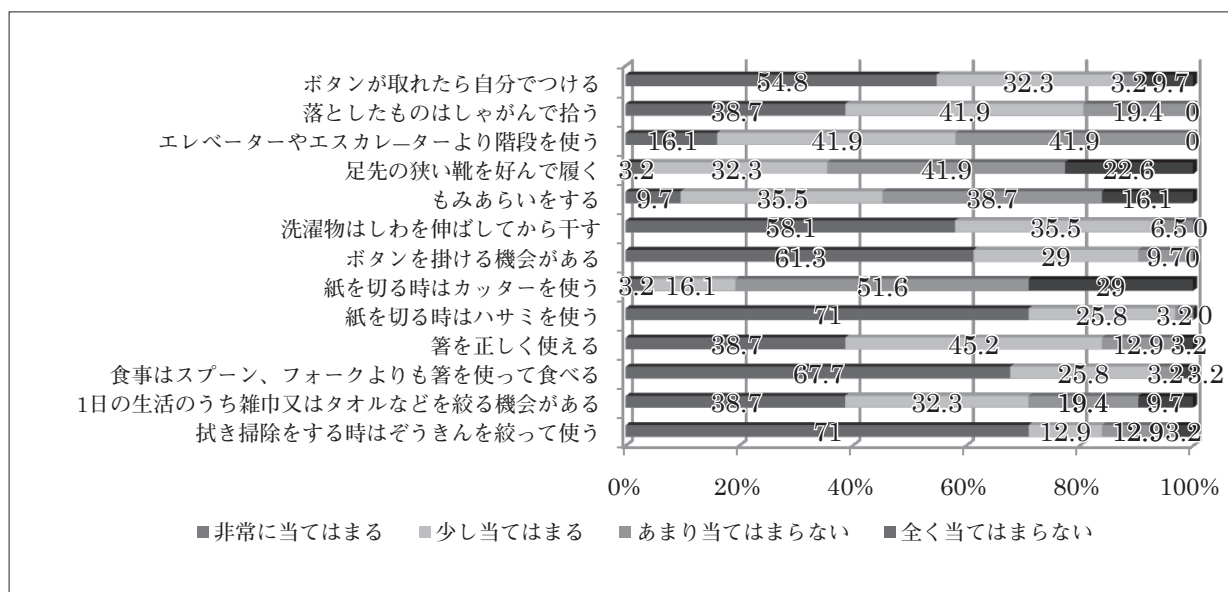


図1 学生の日常生活体験

し当てはまる」11人(35.5%)、「あまり当てはまらない」5人(16.1%)、「全く当てはまらない」3人(9.7%)であった。

辻の報告では、タオルを正しく絞ることができる学生が比較的多く、今回の調査はそれを裏付ける結果とも言える。ただし、日常的な雑巾やタオルの絞り方や頻度については、今回のアンケート内容からは明確にすることはできず、【揉み洗いをする】では、「非常に当てはまる」は5人(9.7%)と低い。このことから、大日向ら<sup>5)</sup>の先行研究同様、生活様式の機械化により、「揉み洗い」などをはじめとする手指を使う動作は、日常生活の中で体験することは少ないことが考えられる。

【箸を正しく使える】は、「非常に当てはまる」は12人(38.7%)、「少し当てはまる」は14人(45.2%)、「あまり当てはまらない」は4人(12.9%)、「全く当てはまらない」は1人(3.2%)であった。また、【食事はスプーンやフォークより箸を使って食べる】は、「非常に当てはまる」は21人(67.7%)、「少し当てはまる」は8人(25.8%)、「あまり当てはまらない」は1人(3.2%)、「全く当てはまらない」は1人(3.2%)であった。

大日向の調査では、箸、ハサミ、包丁の持ち方は正しいがうまく使えない学生がいたという結果であった。一方、辻の実技調査では、【箸を正しく動かす】は、「できる」が30人(93.8%)であり、ほとんどの学生が箸を正しく動かすことが出来ていた。

しかし、客観的に肯定的な評価を得ていても、箸を正しく使えていると認識している学生は、調査の結果、全体の38.7%であった。このことから、箸の正しい使い方は特に意識することなく、習慣化された動作として身についたものと考えられる。

また、その他の日常生活のなかで細かな手指の動きが必要と思われる項目については、【紙を切る時はハサミを使う】は、「非常に当てはまる」22人(71.0%)、「少し当てはまる」8人(25.8%)、

「あまり当てはまらない」1人(3.2%)、「全く当てはまらない」はいなかった。【紙を切る時はカッターを使う】は、「非常に当てはまる」1人(3.2%)、「少し当てはまる」5人(16.1%)、「あまり当てはまらない」16人(51.6%)、「全く当てはまらない」9人(29.0%)であった。【ボタンを掛ける機会がある】は、「非常に当てはまる」19人(61.3%)、「少し当てはまる」9人(29.0%)、「あまり当てはまらない」3人(9.7%)、「全く当てはまらない」はいなかった。【ボタンが取れたら自分でつける】は、「非常に当てはまる」17人(54.8%)、「少し当てはまる」10人(32.3%)、「あまり当てはまらない」1人(3.2%)、「全く当てはまらない」3人(9.7%)であった。

紙を切る時には、ハサミではなくカッターを使ったり、ボタンがついている服を避けて選んだり、ボタンが取れていてもつけない学生が多いのではと考えたが、結果は、紙を切る時はハサミを使い、ボタンを掛ける機会も多く、ボタンが取れたら自分でつける学生も多かった。

野々村<sup>6)</sup>や大日向らはハサミの持ち方・使い方ができない学生が多くいたことに対して、生活技術能力の低さや生活技術の習得状況の低下を指摘しているが、辻が対象とした学生的生活技術能力はかならずしも低いとは言えず、それらは、日常生活のなかで体験から習得されたものも少なからずあると考える。

### 3.日常生活体験の頻度

【自分の部屋は自分で掃除する】は、「ほぼ毎日」はおらず、「週3回以上」4人(12.9%)、「週1～2回」26人(83.9%)と一番多く、「しない」1人(3.2%)であった。住居形態による差は見られず、ほとんどの学生が自分の部屋は自分で掃除しており、頻度としては週に1回が一番多かった(図2)。

また【風呂場・トイレの掃除は自分でする】は、「ほぼ毎日」は3人(9.7%)、「週3回以上」は6人(19.4%)、「週1～2回」は16人(51.6%)で



一番多く、「しない」は同居の6人(19.4%)であった(図3)。

中村ら<sup>7)</sup>の生活体験実態調査や小沢ら<sup>8)</sup>の報告でも、8割の学生が自分の部屋は自分で掃除しているが、これは、80%の大学生が個室を所有し、掃除・整頓についても自分の部屋のみ行う傾向があり、特に男子にその傾向が強いと報告している。また入江ら<sup>9)</sup>は高校生・大学生が自分以外の家族のために家事をする経験は少ないとしている。本調査では性差については明らかにしていないが、大部分の学生が個室を有していると考えられる。また、同居学生の場合、共同で使う風呂・トイレなどの掃除をしない学生が多いことなどと併せて考えると、先行研究と同様、プライベート空間は大切にすが、他者も使用する生活環境をきれいに気持ち良く整えるということを学ぶ機会が日常生活のなかで少ないことが考えられる。

【自分で食事を作る】は、「ほぼ毎日」は10人(32.3%)、「週3回以上」は4人(12.9%)、「週1~2回」は10人(32.3%)、「しない」は同居の7人(22.6%)であった。後述の洗濯と同じく、独居のほとんどの学生が毎日自分でしているが、同居の学生は、食事を作る頻度は独居の学生に比べると少ない(図4)。また食器の後片付けについても同様の傾向であった(図5)。

「食事をする」という行動は、「料理のレシピを考える」「食材を買い物する」「調理をする」「お皿に盛りつける」「食べる」「食器を洗う」「食器棚に片付け、テーブルをふく」という一連の工程があり、手の細かな作業も必要である。食事の支度をしない学生の中には、大日向らの指摘のように包丁をうまく使えない学生もいることが示唆される。また、これら一連の工程で効率良く作業するための段取りや手順について考える機会が持たず、「食べる」という食物を口にする行動だけを「食事」と受け取ることもあると考えられる。

【洗濯は自分でする】は、「ほぼ毎日」は5人(16.1%)、「週3回以上」は6人(19.4%)、「週1~2回」は10人(32.3%)と一番多く、「しない」

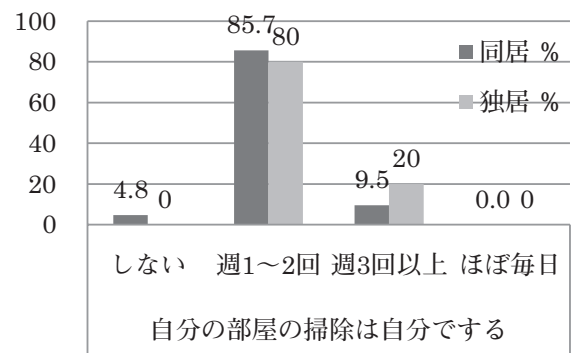


図2

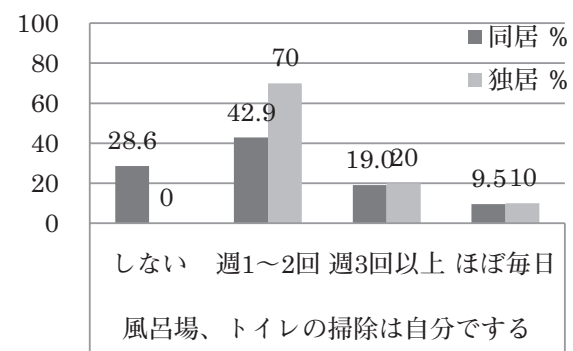


図3

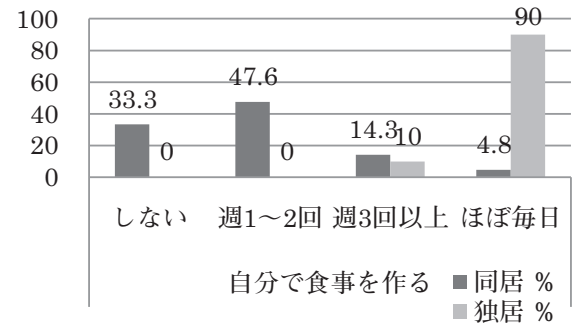


図4

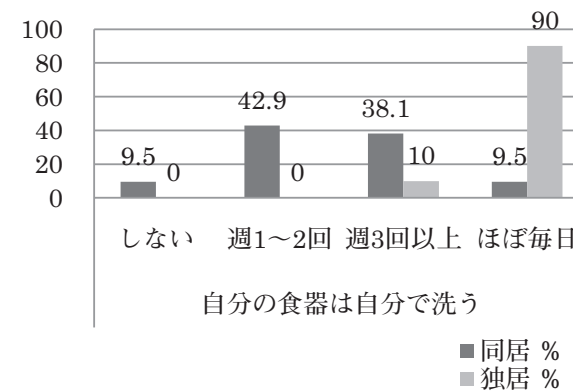


図5

は同居の10人（32.3%）であった。【洗濯干しは自分です】、【洗濯物は自分でたたむ】についても同様の傾向で、週に1～2回が一番多く、「しない」のは同居の学生であった。また、前述の結果と考察IV-2の「揉み洗いをする」の日常生活体験が少ないことも合わせて考えると、手を使って洗濯する頻度は少ないことが推測される。

以上より、独居の学生の食事の支度や後片付けなどを除けば、掃除、洗濯などは週に1～2回しか行っていない。学生の生活技術能力の低下が指摘されはじめた20年前より、現在はさらに生活様式は利便性や経済性が向上しており、手を使って家事労働をする頻度は少なく、意図的に模倣したり習ったりする機会は日常生活のなかでは少ないと言える。

4. 看護技術教育への示唆

本調査では、学生の生活技術を約20年前と比較した辻（2008）の結果について、日常生活体験との関連を見るためにアンケート調査を行った。その結果、学生は生まれた時からすでに生活様式が機械化されており、ボタン一つ押せば調理や洗濯、掃除などができる環境で育っている。それは、誰かの真似をすることや、教わることもなくてもできる生活実態であることが明らかになった。さらに、日常生活行動が自分自身のために向きやすく、他者のために何かをする、配慮するということが少ない傾向にあることが推測された。効率を重視する第一義的な日常生活を送っているため、反復学習しなくても容易に生活できると考えられる。

看護技術は、対象を理解し、その人に合った援助を見出し、原理原則に基づいた意図的な行為である。そのため、その手続きや正しい方法を習得していく必要があるが、前述のような学生の背景をふまえた教育方法の工夫が必要である。学び方や模倣をすること、意識の変容を促すには、川島<sup>10)</sup>が述べるように、頭で考えながらまずやり方を真似るプロセスから入り、模倣してきたやりか

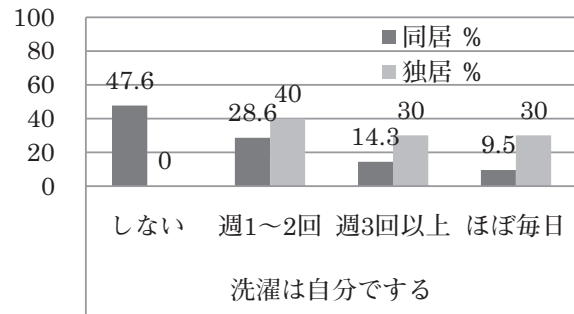


図6

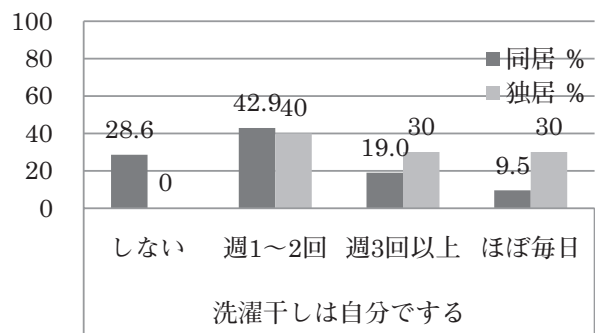


図7

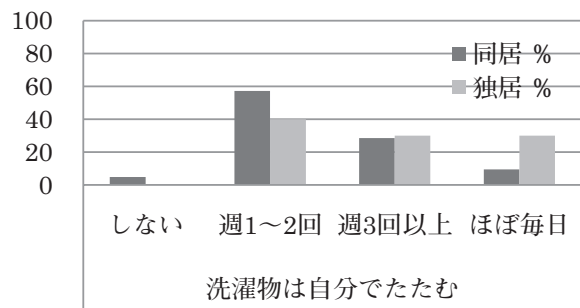


図8

たについて意味の捉えなおしができるような状況の設定が必要であると考えられる。

また、自分自身の行動を振り返ることで、本人主体から他者主体への意識を変化させる動機づけになると考えられる。しかし、簡便化された生活、個人主義的な生活スタイルにより生活体験の乏しさに身を置いている状況は、学生だけでなく教員にも当てはまる事が考えられる。そのため、模倣するなどの力がない学生に対して、教員がロールモデルとなっていくことも看護教育の中で我々

の課題である。

川島は、頭で考える技術「教育」とともに、技術「訓練」、反復トレーニングで身につけること抜きに実践力の向上はあり得ない。また、知識的にその方法をマスターしてもそれを反復実施（訓練）して身体知（技能）に変換していけるような教授方法を提供することが重要であると述べている。そのためにも、学生が主体的に学習できるように、人的、物的環境を提供することも重要であると考えている。

### 5. 研究の限界と今後の課題

今回のアンケート調査では、看護技術に必要とされる巧緻動作やボディメカニクスを日常生活と関連させて調査した。しかし、対象者31人と少数であること、本校のみと限定されていること、今回のアンケート内容は生活体験の中の一部であったことから、看護学生の一般的傾向を反映したものとは言えないところがある。

また、今後の課題として、看護技術授業開始前、終了後でのアンケート調査を実施することで、学生の意識変化と技術の模倣から習得するための過程が明確化できると、看護技術教育方法の一助となるのではと考えられる。

## V. 結論

生活体験と看護技術習得に関連する先行研究から、生活体験が乏しいために看護技術習得が困難ではないかと予測し、A大学看護学科1年生31人に、日常生活体験に関するアンケート調査を実施し、以下の結果を得た。

1. 生活技術の習得に関連する日常生活体験の中で、学生自身が体験していると認識しているものは「落としたものはしゃがんで拾う」「拭き掃除をする時は雑巾を絞って使う」「一日の生活のうち雑巾又はタオルなどを絞る機会がある」「食事はスプーン・フォークよりも箸を使って食べる」「紙を切る時はハサミを

使う」「ボタンが取れたら自分でつける」「ボタンをかける機会がある」などであった。

2. 体験することが少ないと認識しているものは「足先の狭い靴を好んで履く」「揉み洗いをする」「エレベーターやエスカレーターよりも階段を使う」などであった。
3. 日常生活体験の頻度として、「自分の部屋の掃除は自分でする」、「風呂場・トイレの掃除は自分でする」「洗濯は自分でする」は、週に1～2回の頻度でするとというのが一番多かった。
4. 食事の支度や食器洗いについては、独居の学生は毎日するが多いが、同居の学生はしない学生もおり頻度も少なかった。また、洗濯についても、しないと回答したものは住居形態が同居の学生のみであった。

以上より、学生自身が日常的に体験していると認識していても頻度としては少ないものであり、生活技術を習得する機会に乏しく、看護技術を教育するうえで、自分自身の振り返りや、反復トレーニングが重要であることが示唆された。

## 引用文献

- 1) 辻慶子他：看護学生の生活技術の実態調査 北海道文教大学研究紀要 No.33 2009 p 109-115
- 2) 持永静代：学生の手指・足などの運動機能と技術教育 看護教育 27 (10) 1986 p 636-641
- 3) 室みどり：女子学生における足指機能の研究 和歌山信愛女子短期大学紀要 27 p 11-16 1987
- 4) 高橋由紀他：看護学生のボディメカニクス習得に関する研究 (1) —シーツ交換時の表面筋電図と疲労感調査より— 県立長崎シーボルト大学 看護栄養学部紀要 第4巻 p 23-30 2003
- 5) 大日向輝美他：看護系大学生の生活技術と生

活行動の実態 日本看護学会論文集看護教育

p 132-134 1998

- 6) 野々村典子他：看護系大学生の日常における手指の動きと家事経験 第20回日本看護学会集録 看護教育 p 240-243 1989
- 7) 中村由佳他：介護福祉学科学生の実生活実態の調査報告 松本短期大学紀要15 p 155-164 2006
- 8) 小沢紀美子他：青少年（小・中・高・大学生）の住意識に関する調査研究 日本建築学会学術講演概集1989 (9) p1029-1030
- 9) 入江和夫他：高校生・大学生の生活技能に関する実践・意欲 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第22号 p 81-90 2006
- 10) 川島みどり：インタビュー看護の未来を[TE-ARTe]する基礎看護技術教育の温故知新 看護教育Vol.51 No 1 p 12-20 2010

(2010年1月18日受稿)



## 生活体験に関するアンケート

このアンケートは皆さんの生活体験についての傾向を理解し、看護技術の指導に役立てるためのものです。個人の評価には関係ありません。当てはまる番号または答えを右端の( )内に記入してください。

## I. あなた自身について伺います。

- |     |                        |      |       |       |
|-----|------------------------|------|-------|-------|
| (1) | 性別はどちらですか。             | 1.男  | 2.女   | ( )   |
| (2) | 年齢はおいくつですか。            |      |       | ( ) 歳 |
| (3) | 現在の同居、独居の別をお答えください。    | 1.同居 | 2.独居  | ( )   |
| (4) | 利き手はどちらですか。            | 1.右  | 2.左   | ( )   |
| (5) | 家事援助をしてくれる他者と同居していますか。 | 1.はい | 2.いいえ | ( )   |
| (6) | 寝具は何をつかっていますか。         | 1.布団 | 2.ベッド | ( )   |

## II. あなたの生活について、いずれかの番号でお答えください。

(1.全く当てはまらない 2.あまり当てはまらない 3.少し当てはまる 4.非常に当てはまる)

- |      |                            |     |
|------|----------------------------|-----|
| (1)  | 拭き掃除をする時は、雑巾を絞って使う。        | ( ) |
| (2)  | 一日の生活のうち雑巾又はタオルなどを絞る機会がある。 | ( ) |
| (3)  | 食事はスプーン、フォークより箸を使って食べる。    | ( ) |
| (4)  | 箸を正しく使える。                  | ( ) |
| (5)  | 紙を切る時は、はさみを使う。             | ( ) |
| (6)  | 紙を切る時は、カッターを使う。            | ( ) |
| (7)  | ボタンを掛ける機会がある。              | ( ) |
| (8)  | 洗濯物はしわを伸ばしてから干す。           | ( ) |
| (9)  | 揉み洗いをする。                   | ( ) |
| (10) | 足先の狭い靴を好んで履く。              | ( ) |
| (11) | エレベーターやエスカレーターより階段を使う。     | ( ) |
| (12) | 落としたものはしゃがんで拾う。            | ( ) |
| (13) | ボタンがとれたら自分でつける。            | ( ) |

## III. あなたの生活体験の頻度について、いずれかの番号でお答えください。

(1.しない 2.週一～二回 3.週三回以上 4.ほぼ毎日)

- |     |                   |     |
|-----|-------------------|-----|
| (1) | 自分の部屋の掃除は自分でする。   | ( ) |
| (2) | 風呂場、トイレの掃除は自分でする。 | ( ) |
| (3) | 自分で食事を作る。         | ( ) |
| (4) | 自分の食器は自分で洗う。      | ( ) |
| (5) | 洗濯は自分でする。         | ( ) |
| (6) | 洗濯干しは自分でする。       | ( ) |
| (7) | 洗濯物は自分でたたむ。       | ( ) |

